占術師速水丈太郎　夜の探し物

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

占術師速水丈太郎　夜の探し物

【Ｎコード】

Ｎ５４９５Ｉ

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

仕事の帰りの夜道で一人探し物をしている男の子に出会った速水。彼の探し物をどうやって手伝うのか。速水丈太郎シリーズ、今回はほろりとするお話です。

第一章

占術師速水丈太郎　夜の探し物

仕事を終えてだった。帰路についていた。

「さて」

黒い髪で顔の左半分を隠した青年である。顔はその髪で左半分がほぼ隠されてしまっている。しかしその顔立ちが整っていることは右半分でもわかる。流麗である。涼しげな切れ長の黒い目に適度な高さの鼻、小さめの形のいい唇に細い顎。どれを取っても整っている。

その服は白く裏地が赤のコートに青いスーツ、そこに白いシャツが見える。ネクタイは赤であり靴は黒だ。そうして出で立ちの青年だった。

彼は今夜道を歩いていた。道は人がいないハイウェイの曲がった道だった。彼の右手には岩山があり左手は崖である。崖の下にはさらに同じ様な道がある。彼はそこを一人歩いているのだ。

そこを歩いているとだった。やがて前に小さな男の子が見えてきた。黒い半ズボンに赤いシャツを着ている。年齢は八つ程度であろうか。その子が必死に何かを探しているのが見えたのだ。

彼はその男の子を見て声をかけた。その青い夜の白い月明かりの中で。

「どうしたのですか？」

「ちょっと」

言いながらも彼の方を見ずに探し続けているのだった。

「探してるのがあって」

「探し物ですか」

「うん、けれどないんだ」

辺りをきょろきょろと探し回りながら彼に応える。しかし彼の方

は見ないままだ。
「何処にもね」
「ふむ」
彼は男の子の言葉を受けてまずはコートの左ポケットに己の左手を入れた。そうしてそのポケットから出してきたものは。
死神のカードだった。彼はそれを見て納得した顔で頷いたのだった。
「成程。やはりそうですか」
頷いてからだった。男の子に顔を戻して。再度問うのであった。
「もし」
「どうしたの？」
「探し物でしたら」
こう男の子に声をかけるのだった。
「私も協力しましょうか」
「協力？」
その声を聞いて顔を向けてきた。見れば幼い、女の子といっても髪さえ長ければ通用するような。そうした可愛らしい男の子だった。
その顔を見て速水はまずは無言になった。だがそれをすぐに止めて男の子に言ってきたのである。
夜の世界は黒くはなかった。むしろ青かった。夜空は青くそこに白い満月がある。月は優しい光で白い岩山や黒がかった青い道や純白のガードレールを照らしその下にある緑と荒い薄茶色の崖も照らしていた。そしてその一番下にある青と銀の海もである。
その中で男の子の顔を見ながら。彼は言うのであった。
「私でよければ」
「手伝ってくれるの？」
「はい」
静かに微笑んで男の子に述べるのだった。
「探し物も察しがつきましたので」
「嘘、もうなんだ」

彼の言葉を聞いて驚いた顔になる男の子だった。
「僕はまだなのに」
「私にはわかったのですよ」
しかし彼は微笑んだまま彼に述べ続ける。
「それもよく」
「わかったんだ」
「はい。それはですね」
彼はさらに言う。
「上にありますよ」
「上に？」
「そう、お空にです」
そこにあると告げるのだった。
「そこにあります」
「お空にって」
「貴方がお空に行けばそれを見つけることができます」
男の子に微笑みを向けたままでの言葉だった。
「それによってです」
「お空かあ」
男の子は彼の言葉を受けて上を見上げた。その白い満月に照らされている青い空をだ。その夜空を見上げたのである。
「そこに行けばあるんだね」
「どうされますか？」
あらためて男の子に問うた。
「お空に行かれますか？」
「うん」
行きたいとこくりと頷く男の子だった。

第二章

「そこに僕の探し物があるんだよね」
「はい」
男の子の言葉にこくりと頷いて答える。
「その通りです」
「そう。だったら」
彼の言葉を受けて確かな顔で頷いた男の子だった。
「御願いするよ。上に行きたい」
「宜しいのですね」
「うん、お空に行きたい」
また言う男の子だった。
「絶対に。それでいいよね」
「はい。それではです」
男の子の言葉を確かに聞いて彼はまたコートの左ポケットに手を入れた。すると今度そこから出て来たカードは。
月のカードだった。先程の死神のカードと同じくタロットのカードだ。それが出て来たのである。
それを顔の前にかざす。カードに描かれているその月の姿を見つつ何かを念じた様であった。するとその顔の左半分を覆っていた髪があがった。
そこから黄色く輝く目が出て来た。そしてその目の光が増し眩い光を発したかと思うと。
男の子の前にあるものが出て来た。それは三日月であった。
月には顔も描かれている。あの魔道書等に描かれている三日月だ。それが出て来たのである。
「お月様？」
「それに乗りなさい」
彼は男の子に対して告げた。

「それに乗ってです」
「上にあがるの？」
「その通りです。それで上に行くのです」
まさにその通りだと話すのだった。
「お空にです」
「うん。じゃあ」
「行かれるべき場所は」
それについても話す彼だった。
「満月にです。そこに行きなさい」
「わかったよ。それじゃあ」
男の子は彼の言葉に従いその三日月の上に跨った。すると月は自然に空にある満月のところまで来た。するとそこから出て来たのは。
「高司、来たんだね」
「やっと来たのね」
優しい顔をした少し年配の男と女が満月から出て来たのだった。
「待ってたんだよ」
「何処にいたのかと思ってたのよ」
満月から出て来た二人はその白い満月を背にして男の子に言う。男の子も三日月から降りて二人のところに来て言うのだった。
「お父さん、お母さん」
「探したよ、本当に」
「何処に行ったのかって」
「僕もだったんだよ」
二人の側まで来てその小さな両手を二人を囲む様にして抱き締めての言葉であった。
「ずっと探してたんだよ」
「それでやっと会えたんだね」
「こうして」
「うん。それはね」
ここで彼の名前を言おうとする。するとであった。彼はもう男の

子達のところに来ていた。三日月のすぐ側まで来てそこに立っているのであった。
「この人が僕をここまで連れて来てくれたんだよ」
「貴方がですか」
「この子を」
「ええ」
男の子の両親に対して微笑んで頷いてみせた。
「そうです」
「それは。どうも有り難うございます」
「おかげでまた一緒になることができました」
二人は満面の笑顔になりそのうえで深々と頭を下げたのだった。
「それも全て貴方のおかげです」
「全くです」
「礼には及びません」
しかし彼は謙虚な様子でこう述べるだけであった。
「私はただこの子の探し物を手伝っただけですから」
「それだけだと仰るのですか」
「その通りです」
まさにそれだけだと。父親に対して述べる。

第三章

「ですから何もお気遣いなく」
「そうですか」
「そこまで仰るのですか」
「さあ、三人揃いましたし」
彼は恐縮する両親に対して今度はこう述べたのであった。
「御機嫌よう」
「お兄ちゃん、またね」
男の子が微笑んで彼に告げてきた。
「また会おうね」
「そう、また何処かで」
「それでね」
微笑みを返してきた彼に対してさらに言ってきた。
「お兄ちゃんお名前は？」
「名前ですか。私の」
「うん。何ていうの？」
ふと気付いた様な顔になった彼に問うてきたのである。
「お兄ちゃんのお名前。何ていうの？」
「速水です」
すっと笑っての言葉であった。涼しげで落ち着いた笑みである。
「速水丈太郎といいます」
「速水丈太郎さんっていうんだ」
「そうです。宜しければ覚えておいて下さい」
その微笑みと共にまた述べる速水だった。
「ではまた。縁があれば」
「うん、またね速水さん」
男の子は手を振って彼に最後の別れを告げた。そうして側に立っている彼の両親と共に月の中に消えるようにして姿を消していく。

速水はその男の子とその家族を何時までも見送るのだった。その青い空に浮かぶ白い満月の光を正面から浴びながら。
「おや。いいことがあったのかい？」
「そう見えますか？」
「ああ、見えるね」
雑貨屋に見える。しかしそれにしては店の中がやけに薄暗くしかも売っているものはイモリの干物や人の形をした木の根に何か素性の知れない粉薬や松脂、後は何でも死海から採ってきたらしい塩や人のものと思われる手に髑髏、そうしたものばかり並べられている為真っ当な店でないのはわかる。その店に沈む様にして座っているやたらと長く垂れ下がった鼻を持つ老婆が自分の前に立っている速水に対して言ってきたのです。
「にこりとしてね。何かあったのかい？」
「何があったように見えますか？」
「あの女に告白が通ったということはないね」
老婆は目を細めさせて今自分が言ったその言葉をすぐに否定してみせた。
「あの女に限ってそれはね」
「そうなれば最高なのですが」
速水も微笑んでそれについてはこう述べるのだった。
「残念ですがそうではありません」
「そうじゃな。あの女は天性のたらしよ」
それだというのである。
「男もいいがむしろ女じゃな」
「その様ですね。特に最近は」
「女とばかり寝ておる」
こう言うのであった。
「好き者よ、相変わらずのう」
「ですから残念ですがそれではないのです」
あらためて老婆に告げる速水であった。

「それは言っておきます」
「ふむ。では何じゃ？」
「探し物を見つけられたのです」
その流麗な目を細めさせ形のいい唇を微かに上にさせての言葉である。
「それでなのですよ」
「ふむ。探し物をか」
「そうです。それではですね」
「うむ。何が所望じゃ？」
「松脂を下さい」
それだというのである。
「それとエメラルドの粉を」
「あとは何が欲しいのじゃ？」
「それと千年ナメクジの分身から採った粉と蝮の皮、蝦蟇の油を煮詰めたものを」
「わかった。ではほれ」
そういったものを自分の横から取り出してみせて彼の前に並べてみせる。見ればどれもかなり異様な代物ばかりであった。まさに普通のものは一つもない。
「持って行け。安くしておくぞ」
「はい、それでは」
金色のキャッシュカードを出してそれで支払う。そのうえで一連の異様なものを取り出した世界のカードに収めて店を後にする。その時も微笑んでいる速水だった。

占術師速水丈太郎　夜の探し物　　完

２００９・１１・４

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5495i/

占術師速水丈太郎　夜の探し物

2010年10月8日15時13分発行